

南ぬ風

Vol.19

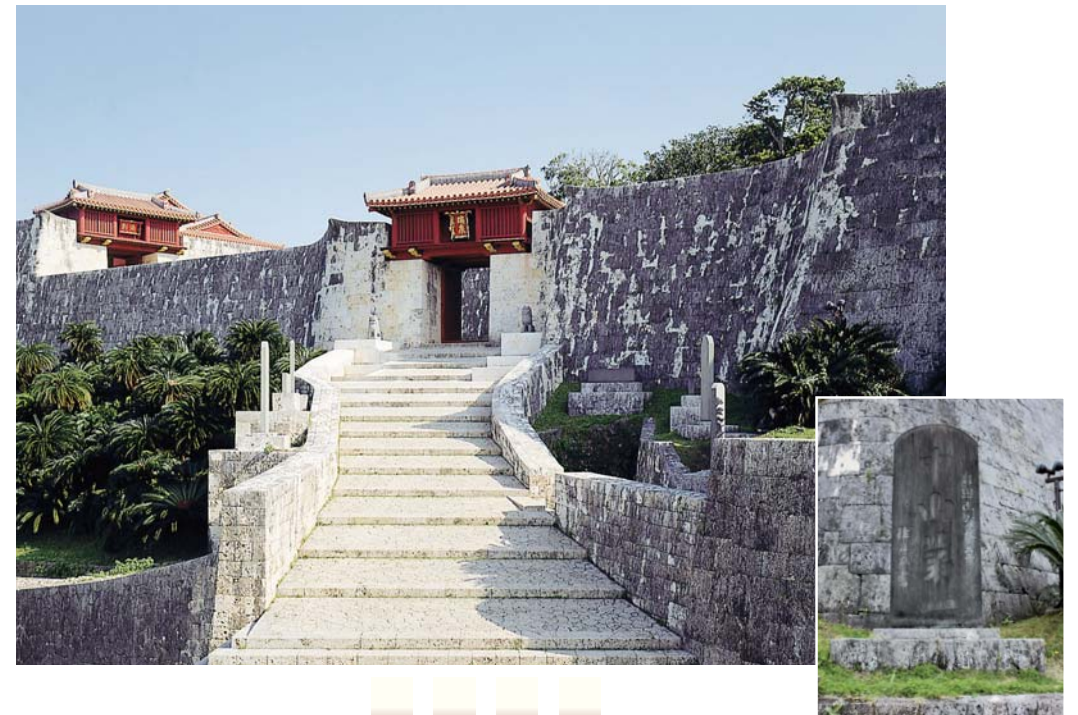
2011.4~6

春号



【南ぬ風インタビュー】 王朝時代の技術の復活と継承で、首里城を守り続けてもらいたい
沖縄県立芸術大学教授、附属図書・芸術資料館長／安里進

《沖縄の色・形》 多彩な模様に繊細さが漂う／読谷山花織



なしがいっぱい

公園点描

首里城公園

冊封七碑

「冊封七碑」とは、首里城の瑞泉門下にある龍樋周辺に設置された七つの石碑のことです。中国皇帝より琉球国王の即位を宣言するために派遣された冊封使たちは、龍樋の水の清らかさを讃え、漢詩を詠んだり題字を残しました。その文言を石碑にしたのが「冊封七碑」です。原碑は沖縄戦で破壊されましたが、戦前に作成されていた拓本などをもとに復元されています。

ふえー かじ 南ぬ風

誌名『南ぬ風（ふえーぬかじ）』について
「南ぬ風」は梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信することを意味しています。

この度の東北地方太平洋沖地震により被災されました方々に心よりお見舞い申し上げます。
被災地の日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

C O N T E N T S

南ぬ風インタビュー Vol.12

3

王朝時代の技術の復活と継承で、首里城を守り続けてもらいたい
沖縄県立芸術大学教授、附属図書・芸術資料館長／安里 進



沖縄の色・形

6

多彩な模様に繊細さが漂う 読谷山花織
取材協力／読谷山花織事業協同組合



事業紹介

8

公園の管理運営 書院・鎖之間の案内解説
お茶とお菓子で王朝時代の「おもてなしの心」を伝えています
調査研究事業
リュウキュウベンケイの利用／サメ・エイ類の繁殖様式（生まれ方）／
定置網による混獲と放流／平成22年度 海洋博覧会記念公園管理
財団 調査研究・技術開発助成事業
普及啓発事業
美ら海自然教室「サメの秘密を探る」／美ら島・美ら海こども工作室「ランの
花を作ろう～牛乳パッククラフト～」／第11回 アジア太平洋蘭会議・蘭展
—沖縄大会—開催に向けて／水族館の刊行物／野生動物と海のゴミ—環
境保全への取り組み—／首里城公園企画展うるしの王国 琉球



沖縄の自然 南の島の植物と動物たち

14

シリーズ 沖縄の大木⑫ ハスノハギリ
シリーズ 沖縄の希少動植物⑫ カンダヒメラン/カンムリブダイ



沖縄の民話

16

鼠浄土
資料提供／NPO法人沖縄伝承話資料センター

ニュース&イベント情報（4月～6月）

18

総合研究センター、首里城公園管理センター、海洋博公園
管理センター



ふしぎがいっぱい公園点描

20

首里城公園 冊封七碑



表紙について
浜の花四「花波」
名嘉陸稔（なかぼくねん）
一九五三年伊是名島生まれ。
版画家。造形作家。月桃紙に
裏手彩色と呼ばれる技法で
制作される作品群は、われわ
れ現代人が見過ごしてしま
いがちな大自然の機微、生きと
し生けるものの魂の声を、時
に優しく、時に力強く、私達
に伝えてくれる。

考古学は 犯罪捜査に似ている

——まずは教授のご専門のことからお聞きしたいと思います。

安里 専門は考古学です。ただし、古い時代ばかりではなくて考古学の方法を応用した新しい時代の研究もやっています。グスク時代の研究がメインテーマですが、そのほかに漆器や測量技術の研究などもやっています。

——沖縄で考古学というのは少し馴染みが薄いようですが。

安里 琉球史の研究は文献研究から始まりました。復帰前の沖縄では、考古学は文献研究の補助学という位置付けでした。やがて日本が高度経済成長時代に入って各地で大規模開発が展開すると、遺跡が壊される前の事前発掘調査という形で考古学調査が盛んに行われるようになってきたわけです。沖縄でも日本復帰後の開発の流れの中で、発掘調査が広く行われるようになって考古学が認知されるようになったのです。

歴史を調べるには、文献史学や民俗学などからアプローチする方法がありますが、考古学は人間が残したモノから歴史を復元していきます。ですから、大昔のモノでも現在のモノでも研究対象になります。考古学とよく似た仕事をし

ているのが警察です。犯罪捜査においては物証が重要になるわけで、現場に遺されたモノを分析して事実を明らかにしていきます。考古学もよく似たようなことをやっている学問です。

業務文書で分かった 琉球漆器の実態

——教授は当財団が発行の『琉球王朝の華——美・技・芸——』の編集委員でもいらつしやいましたが、首里城との関わりはどのようなことからだったのですか。

安里 浦添市美術館を立ち上

考古学、琉球史、漆芸史など研究分野が多岐にわたる安里先生に、琉球漆器や首里城について、現在、研究中のテーマについても語っていただきました。

王朝時代の技術の 復活と継承で、 首里城を守り続けて もらいたい



南ぬ風 vol.12
Fe-nu-kaji Interview インタビュー

沖縄県立芸術大学教授
附属図書・芸術資料館長

安里 進 Susumu Asato

【あさと すすむ】1947年那覇市首里生まれ。琉球大学法文学部史学科卒業。大阪府教育委員会文化財保護考古学技師、沖縄県浦添市教育委員会文化部長を経て、2005年から沖縄県立芸術大学教授。専門は考古学・琉球史・漆芸史・測量技術史。『考古学から見た琉球史』『グスク・共同体・村』『琉球王権とグスク』などの著書の他、論文・報告書など多数がある。

げる仕事をしていたのですが、浦添市美術館はご承知のように漆器の美術館です。それで漆器の勉強を始め、県工芸指導所にも1年間通って漆芸技術も学んだりしました。そして、琉球漆器の文献史料の分析をおして琉球王国時代の漆芸技法の復元研究をやっていたところに、首里城正殿の扁額を復元しようという話がやってきました。これまでの研究の成果をもとに当時の技法で扁額の復元ができるのではないかとということで、首里城の整備事業とかかわることになったわけなんです。

——貝摺奉行所についての論考も発表されていますが。

安里 貝摺奉行所の研究はとても面白かったですね。それまで、「王府は優れた漆器をつくるために金と時間に糸目を付けなかった」とか、「職人は、1日1寸角（3センチ角）の漆塗りしかやらなかった」などといわれていました。しかし、貝摺奉行所の文書を分析していくと実態はかなり違うということが分かってきたんです。

王国時代は、王府の直営工房に漆器職人を集めて漆器を作らせていたと言われていました。ところが実際はそうじゃなかった。貝摺奉行所の役人が、1個の漆器を作るのにどのような材料がどれだけの数量が必要か、製作に延べ何日



王朝時代の技術によって復元された「中山世土」の扁額

ともありました。職人にとつては、かなり厳しい条件で漆器づくりがおこなわれていたことが分かってきました。そういう中からいいものが生まれてきたわけです。人間、金と時間に恵まれ過ぎるとダメになりますからね（笑）。

——文献史料というのは、どういうものだったのですか。

安里 役人は今も昔も同じで、貝摺奉行所の役人も業務文書を作っています。『御道具図并入目料帳』という文書で、1個の漆器をつくるために必要な材料の数量だけでなく、筆や紙などの事務用品の数量も全て計算して製作費用を積算しています。受注した民間工房の仕事ぶりを点検する役人の仕事もあって、その日当もちゃんと計算されています。

この文書は明治ころまで長持いっぱいに大量に保管されていたようですが、残念ながら現在では3、4冊ぐらいしか残っておりません。わずか数冊の文書ですが、その分析で、琉球王国時代の漆芸技法が具体的にわかってきました。

基本的な技法は「刻苧―布着―三辺地―真塗下地」というものです。木地の弱いところに刻苧を詰め、漆を摺り込んで木地を強くし、その上から布着せをして漆で固めてさらに補強する。そして漆と地の粉を練った下地づけを3回行い、



墓からの出土品を手にする安里教授

ますが、現在はどうのようなことに関心をお持ちですか。

安里 最近、王や庶民の墓について考えています。浦添ようどれや玉御殿などの王の墓はあの世の王宮で、庶民の墓も王の墓をモデルにして造られています。最近、気付いたことは、沖縄の墓は、王の墓も庶民の墓も、白く仕上げるということです。亀甲墓でも破風墓でも漆喰で白化粧しています。浦添ようどれも玉御殿も造営当初は真っ白だったはずなんです。なぜ白くしたのか。あの世を白い世界としてイメージしていたからではないかと考えています。

それと、浦添ようどれも玉御殿も、首里城正殿がモデルです。しかも、赤い王宮と白い王陵という色の対照性があるのです。これは琉球人の他界観、宗教や思想などが背景にあるのだと思います。首里城の正殿が赤いのは、中国の紫禁城の模倣からきていると思いますが、王の墓を白く仕上げるのは、琉球独自の思想だと考えています。首里城というのは琉球の社会に強い影響力を持っています。庶民の墓

黒漆で中塗りをする。このような基本的な工程のうえで、朱漆を塗ったり、沈金や螺鈿の加飾を施したりしています。工程を簡単に説明しましたが、実際は塗りと研ぎを丹念に何度も繰り返す大変な作業です。

この技法で復元したのが首里城正殿の玉座の後ろにある「中山世土」「永祚瀛壖」「高麗延薫」などの扁額です。額縁の龍の模様も当時の文様を考証して復元したものです。現在は、「三御飾」という儀式に使う漆器の復元や、正殿の外壁も王国時代の漆芸技法で塗り直しています。

琉球漆器は「伝統工芸」といわれていますが、実際は王国時代の技法の多くが失われました。現代に伝わった技法もこの百年間に変化しています。ですから、伝統工芸といっても王国時代の技術そのままではありません。それで、私が目指しているのは、琉球王国時代の漆芸技法を復活させて、本物に限りなく近い御道具を復元し展示すること、正殿などの建物の壁の塗りも、王国時代どおりに再現することです。



「御道具図并入目料帳」の複写の一部。原本は京都大学にある

琉球人の美意識

——漆器以外で首里城に関心をもたれていることなどありますか。

安里 首里城は琉球人の美意識という点からみてもなかなか面白い場所です。首里城には、中国の宮殿や日本の城郭にはない特徴があります。紫禁城は徹底してシンメトリ（左右対称）で構成されています。皇帝権力を表現するためです。日本の城郭は直線や直角構成の美があります。ところが、首里城では、あえてシンメトリや直線・直角構成をさけているようです。歓会門から入って瑞泉門、漏刻門に至るまで城門の左右の城壁の形がまったくシンメトリになっ

ていません。とくに漏刻門の左右の石垣を見ると、絶対にシンメトリにしないぞ！という強い意志さえ感じます。首里城の城壁については、城壁の曲線が特徴だといわれていますが、それだけではないんです。一度、歓会門から久慶門までの城壁面を横からじっくり見てください。石垣の表面が微妙に湾曲していることがわかります。中城グスクの城壁も同じ構造です。円覚寺の山門前の石階段も正面から見ると直線ですが、真横から見ると見事な曲線階段になっています。意外なカ

赤い王宮と白い王陵

——教授はグスクや沖縄人のルーツなどいろいろな研究をされてい

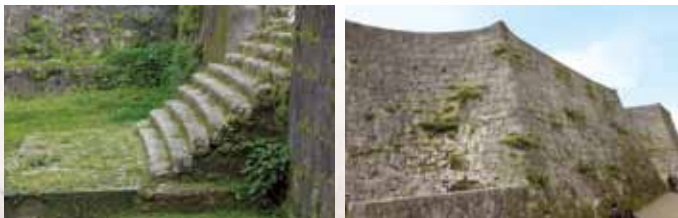
の形だけでなく、遺骨を納める厨子（骨壺）の形も首里城がモデルになっています。文化・芸能だけでなく、あの世のありかたまで首里城から発信されていたようです。

——最後に、財団の今後に期待することなどありましたらお聞かせください。

安里 文献史料の分析から、王国時代の漆芸の基本技法は解明できてきたのですが、実際にその技法で「三御飾」などの漆器を復元したり、正殿を塗り直すとなると、その技術を継承した漆職人がいないという問題に直面しました。それで、漆職人の皆さんと何度も試行錯誤しながら職人さんに技術を身につけてもらうところから始めています。

しかし、苦勞して王国時代の技術を身に付けても、琉球漆器の復元事業や首里城建物の漆塗り直し事業が継続されないと、20年、30年後にまた同じことを繰り返すことになりかねません。首里城では、折角ここまで復活させた技術を、途絶えさせることなく継承していく体制を考える必要があると思います。建物の復元だけでなく、塗りも正確に復元して、その技術も継承し、メンテナン

（平成23年1月28日沖縄県立芸術大学にて）



右)シンメトリを避けている城郭
左)円覚寺山門前の石段

お年寄りの話を頼りに復元

読谷山花織は読谷村に伝わる伝統的な織物のことで、十四、五世紀ごろ、琉球王国の海外交易によって、プータンなど南方の国々から伝わったといわれています。かつては王府の御用布として織られていましたが、明治の中ごろから衰退を始めた、本土からの安い布の流入などもあり大正から昭和にかけて見られなくなっていました。その織物の復活の話が持ち上がったのは一九六四（昭和三九）年のことでした。

当時の池原昌徳読谷村長と読谷村婦人会の曾根みつ会長らが中心となり、村の特産品づくりの一環として読谷山花織の復興が計画されました。早速、復元のため村内から五人のお年寄りが選ばれました。しかし、五人とも幼少のころ

沖縄の色・形

多彩な模様には繊細さが漂う

読谷山花織

ゆんたんぎ
はなうい

長い歴史が途絶え、一時期“幻の花織”と呼ばれていた「読谷山花織」。地元の有志たちによって見事復活を遂げ、今や沖縄が誇る伝統工芸品となっています。「読谷山花織事業協同組合」を訪ね、復活の経緯や花織の特徴について伺いました。取材協力／読谷山花織事業協同組合

花柄と幾何学模様が特徴的な反物

に読谷山花織を織っているところを見聞きしている程度でした。そこで、婦人会で活動していた与那嶺貞さんと比嘉文江さんの二人が、五人のお年寄りから話を聞き、その断片から一つずつ技術を復元していきました。特に首里工芸学校で四カ年間、機織を勉強していた与那嶺さんの知識が役立ちました。また、旧家にわずかに残っていた読谷山花織も大きな手がかりになりました。

その後、読谷村では当初、四カ月間の講習会を開くなどして、花織の反物、ティーサージ（手巾）、ミンサー織の技術を伝え、織り手の育成に努めてきました。織物の材料となる絹糸や木綿糸は県外からですが、染料は伝統を受け継ぐために村に自生する植物にこだわり、気品漂う黄色系はフクギや桃皮、空や海の色を連想させる青色系は琉球藍、太陽を思わせる赤色はクルー（オキナワサル



右) 花織をはじめ昔の織物についても語ってくれた島袋秀さん
左) 「三つの工房で約150人が技術の習得に励んでいます」と語る又吉理事長

トリイバラ）、その他、アカネ、スオウなどを使っています。

「ひやいばな」「ていばな」「ぐうしばな」

読谷山花織の名称は昔からあったものではなく、この復興計画を契機として一九六五（昭和四〇）年ごろから本格的に使われるようになりました。それまでは

「読谷山の浮織」「読谷山の花織ティーサージ」などと呼ばれていたようです。

四十代の頃に村の講習会で技術を習得し、長い間、花織の技術指導をしていた技能保持者の島袋秀さん（九三）は、「布織りは昔から女性の仕事で、芭蕉布を織って自分たちの衣服を作っていました。糸芭蕉の外側の繊維は作業着、芯側の柔かく細い糸はよそ着にしています。が、講習会で習うまでは読谷山花織は織ったことがなかったですよ」と花織復元当時を語ってくれました。

浮織は紋織物の一種で、平織地に色糸によって紋を織り込んでいくもので、裏地に紋の色糸が浮くことから、その名が付けられています。浮織には経浮織と緯浮織の二種類があり、緯糸を通す杼道を

作るために、経糸を上げさせる綜統で紋をつくり、花柄を織り出していきます。



左上) ひやい（綜統）を使っ
ての模様づくり
左下) ぐうし（串）を使っ
ての模様づくり
中) 読谷山ミンサー
右下) 布の裏に出てくる遊び糸

「ていばな」「ぐうしばな」の三種類があります。基本になっているのは「ひやいばな」で、綜統を使って花模様を作り出します。「ひやい」は綜統のことです。平織地に糸花が加わる緯浮花織で、布の裏には花にならない遊び糸が出てきます。この遊び糸について、読谷山花織事業協同組合の又吉弘子理事長は、「昔は裏に出た部分の糸を綿のかわりにして、綿衣と呼ばれる衿の着物にして、冬物として愛用していたようです。裏地に紅型を使っているものもあります」と説明してくれました。

「ていばな」の「てい」は手のことで、平織地の経糸に竹ペラを使って花糸を差し込んでいきます。裏地が縫取織とも云われています。かつては「読谷山花織ティーサージ」と呼ばれていた手拭は、

この手法によるものです。

「ぐうしばな」の「ぐうし」は竹串のこと、串で経糸をすくって模様を作っていきます。主にミンサー織りに使われる手法です。ミンサーはほとんどが縞模様で、かつては女性から恋人に贈られたものだと言われています。

花柄に込められた思い、祈り、願い

読谷山花織の花柄は、その花の形によって「ジンバナ」「オージバナ」「カジマヤーバナ」の名前が付けられており、花織の花の紋様はその三種類で構成されています。「ジンバナ」は「銭花」のこととお金に困らないようにという思い、「オージバナ」は「扇花」で扇のように末広がりに子孫が繁栄することへの祈り、「カジマヤーバナ」は「風車花」で九十七歳の長寿を願ったものです。

「縁起のよいジンバナ、オージバナ、カジマヤーバナの花模様に幾何学的な模様を組み合わせて、緋や縞などいろいろな図柄を工夫しています。布に込められた思いや願い、祈りは、それを受け取った人に必ず伝わっていくと信じられています。読谷山花織の魅力は、刺繍のような多彩な紋様と繊細さ、人の思いが込められた温かさにあると言えるかもしれません。

【国営沖縄記念公園（首里城公園）】

書院・鎖之間の案内解説

お茶とお菓子で王朝時代の 「おもてなしの心」を伝えています



鎖之間での解説の様子

琉球王朝のもてなしの場

「書院・鎖之間」は2007年の1月に一般公開された、首里城公園内では比較的新しい施設です。2008年8月には「書院・鎖之間」に付随する庭園も一般公開されています。「書院・鎖之間」は、首里城正殿に向かつて右側に立つ南殿の背後にあり、「書院」は国王の執務室で、中国皇帝の使者（冊封使）や薩摩の役人を接待するところ、「鎖之間」は王子の控所で、諸役の者を集めて懇談したり、薩摩の役人をもてなすところでした。

いずれも琉球王朝の公式な儀礼が行われるところではなく、国王や王子が訪問客と親しく接するため、の場として使われていました。また、琉球石灰岩に松や蘇鉄が配された庭園は、このような場を彩る空間として設えられたもので、きらびやかな正殿とは対照的に落ち着いた雰囲気漂っています。



笑顔でお迎え。鎖之間の受付

「鎖之間」と 「琉球菓子」の解説

「書院・鎖之間」はおもてなしの場であったことから、それぞれ「御茶之間」「裏御座」と呼ばれる茶室があり、王様や王子様が茶の湯で訪問客を歓待していました。

首里城公園では、このような琉球王朝の伝統的な風習を今に伝えるために、女性解説員が王様や王子様に代わって、お客さまにジャスミンの香り豊かなお茶（さんびん茶）と、王朝時代から伝わる伝統的なお菓子でおもてなしを行っています。お菓子はサブレのような「花ぼうる」、卵をたっぷり使った蒸し菓子の「ちいるんこう」、胡麻あんを包み込んだ「くんぺん」、沖縄を代表する土産菓子の「きんそ糕（ちんすこう）」の4種類で、湯飲みや受け皿、お盆には



お客さまをご案内

壺屋焼や琉球漆器を使用して、王朝時代の雰囲気満喫できる首里城内唯一の体験施設として好評を博しています。

解説員は現在5名で、「鎖之間」と「琉球菓子」について約5分程度の解説を行っています。平日の落ち着いた時間帯では、お客さま一組に対して一人が対応しますが、お客さまが多い場合は、集まったお客さま全体に対して一人で解説を行っています。

この仕事について、解説員3年目の比嘉ゆかさんは「大きな声ではつきりと滑舌よく話すようにしています。特に年輩の方が多いときは、ゆつくりとはつきりと“を心掛けています。ただ、言葉遣いについてはあまり丁寧すぎると、逆にお客さま



お客様にお出ししているお茶と琉球菓子

会話の内容をもっと充実させたい

「鎖之間」では解説の他、建物や琉球菓子のことを詳しく知ってもらうために冊子やパンフレットも用意しています。質問も多く寄せられます。特に年輩の方は建物や庭園に関する質問が多く、「年輩の方が多いときは建物の材料や庭の植物につ



鮮やかな朱の着物に藍染の紅型の羽織。解説員の衣装は元服前の少年の衣装をアレンジしたもの

が気を遣ってしまうこともあり、明るくフレンドリーに“を意識しています。また、立ち居振る舞いについてはマナー・接遇講座などで学ぶこともあり、解説員同士で教えあったり、着物での接遇のため、常に姿勢に気を配りながら落ち着いた身のこなしを心掛けています」と話してくれました。

もちろん、質問は建物や琉球菓子だけに限りません。このため、日頃から首里城をはじめ沖縄に関する知識の習得に努め、沖縄の歴史文化については、毎月行われる首里城でのレクチャーに参加したり、分からないことは学芸員に尋ねたりしているとい



「茶室の炉にある自在鉤のことを鎖（さす）と言っていたようです」と、鎖之間の名の由来について語る比嘉ゆかさん

また、首里城以外の県内の観光スポットに関する質問も多く、観光ガイドブックに目を通したり、実際に観光施設を訪れるなどして情報収集も行っています。この他、「鎖之間」では、受付・案内・配膳の仕方や解説内容についての「お客様アンケート」も実施しており、毎月集計してサービスの仕方や解説内容の改善や充実に努めています。

「解説員としてうれしく励みになるのは、やはり、お客さまに『ありがとう』『よく分かりました』という言葉がかけられることです。『去年来たときも、あなたに解説してもらってとても良かった。来年は家族を連れてきます』と言われたこともあります。お客さまの中には、撮られた写真や年賀状を首里城宛に送ってくださる方もいらつしやいます」と比嘉さん。

今後の抱負について「解説員として、沖縄のことをもっと知らなくてはと思っています。知るだけでなく、例えば染物の体験などをして、体験を元にした話ができれば会話の内容ももっと充実して、お客さまに喜んでいただけるのではと思っています」と語ってくれました。

茶の湯には「一期一会」の教えがあります。対応の仕方ひとつでお客さまの感じ方が違ってきますので、解説員は「おもてなしの心」を大切にしてお客さまに接しています。

【亜熱帯性動植物に関する調査研究】

リュウキュウベンケイの利用



リュウキュウベンケイ

リュウキュウベンケイ（*Kalanchoe spathulata*）は、インド、タイ、ミャンマー、マレーシア、ベトナム、中国、台湾及び日本に自生する多年草です。草丈は30〜120^{センチ}になり、1月から3月にかけて鮮やかな黄色い花を咲かせます。国内では、沖縄本島や伊江島、宮古島、多良間島などに分布していたとされていますが、近年はその自生を確認することは難しく、沖縄県のレッドデータブックではカ

定置網による混獲と放流

ウミガメ、クジラ、イルカ類及びジュゴン、水面での呼吸が必要のため、水中に設置された網に混獲された場合は、多くが呼吸ができずに死亡して発見されています。大型定置網などの水面が開いている網への混獲時には生存率が高く、漁業者の方の協力により放流することも可能です。当財団では1975年から水生ほ乳類が死体漂着迷入、座礁した場合の事例調査や、誤って魚網などに混獲された場合の保護と放流を行っています。

沖縄県中部地方にある大型定置網ではジンベエザメやマンタが入網するほか、クジラやイルカ、ジュゴンなども混獲されています。1996年にはザトウクジラ2頭が混獲され、職員と漁業者が共同で放流を行いました。2004年3月にはオキゴンドウ4頭が混獲され、保護しました。同年4月には、ジュゴン1頭、2006年4月にはミンククジラ1頭が混獲され共に放流しました。2008年12月にはシワイルカ2頭が混獲され、保護を行いました。2010年3月にもシワイルカ10頭が混獲され、9頭を放流しました。

放流時には呼吸間隔や行動観察を行い、放流後も生育できる状態にあるのかどうかを確認します。放流作業

テゴリーの絶滅危惧ⅠA類に分類され、環境省のカテゴリールにおいては、野生絶滅種とされています。

当財団では、平成13年よりリュウキュウベンケイの自生地について調査を行い、その自生について確認を行いました。平成14年には栽培株の開花が確認され、「幻の花咲く」と広く県内に情報発信を行っています。また、平成17年からは、これまで育種素材として利用されていなかった優れた特質に注目し、リュウキュウベンケイを用いた新園芸品種作出調査を行っています。千葉大学園芸学部植物細胞工芸研究室と協同で、これまでに34組の雑種を作出しており、そのなかから優良品種の選抜、品種登録へと進んでいます。

リュウキュウベンケイから生み出された優良品種は、散房花序に上向き、美しい花を咲かせ、花色は親由来の黄色はもちろん、オレンジ、ピンク、白など多くの色が発現しています。また、八重咲きの品種も作出されており、切り花として利用できるのではないかと考えています。リュウキュウベンケイを遺伝資源として活用することにより、より身近な植物として感じてもらい、絶滅危惧種や自然環境への関心の高まりにつなげていけるよう活動していきたいと考えています。

（峯本 幸哉）

は網の構造や水生ほ乳類の生態にぐわしくなければ成功しません。また、危険が伴うため、漁業者と職員の連携が必要です。

総合研究センターでは、混獲されたウミガメや鯨類等のレスキューに関する講習会を行い、職員と漁業者との連携を図っているほか、ウミガメや沖縄県内で見られる鯨類などについての普及啓発リーフレットを作成し、県内漁協やダイビングショップなどに配布しています。また、環境省によるジュゴンが混獲された際のレスキューマニュアルの作成やレスキュー研修会の実施に協力しています。

（小野 英彦）



混獲、放流されたジュゴン

サメ・エイ類の繁殖様式（生まれ方）

ご存知でしょうか？水族館入口のエントランスホールには、繁殖賞コナーがあります。日本で初めて水槽内繁殖に成功した17種が表彰されています。このうち約半数にあたる9種類がサメ・エイの仲間（板鰐類）で、さらにオオメジロザメ、ネムリブカは、3世代まで誕生しています。板鰐類の繁殖様式は、卵生と胎生に大別することができます。胎生種は卵黄依存型、卵食・共食い型、胎盤類似物型、胎盤型の4型に分類されます。卵黄依存型とは、母ザメの子宮内で卵がふ化し、産みだされるというものです。

1995年、台湾で全長約12^{メートル}の妊娠したジンベエザメが捕獲され、台湾海洋大学と当館などで調査を行い、母ザメの子宮内に300尾あまりの胎仔^{たいし}がいることを発見しました。それまでジンベエザメは卵生とされていましたがこの調査で卵黄依存型であることが世界で初めて明らかとなりました。

卵食・共食い型とは、母ザメが胎仔のために卵を子宮内に送り込み、胎仔はこれを食べて成長します。ホホジロザメがこの型にあたることは、当館で行った妊娠したホホジロザメの解剖により世界で初めて明らかと

なりました。また、シロフニでは子宮内の胎仔が卵に加え、別の胎仔を共食いし、成長します。

胎盤類似物型とは、多くのエイ類の繁殖法で、子宮内の胎仔は子宮ミルクと呼ばれる栄養分を飲み、成長します。ナンヨウマンタの出産では、最初に多量の子宮ミルクが排出された後、仔マンタが産みだされ、本型であることが判明しました。胎盤型とはほ乳類同様、胎仔がへその緒を介し、母体から栄養を得て成長します。当館で繁殖したオオメジロザメ、ヤジブカなどがこれにあたります。

（松本 葉介）



ナンヨウマンタの出産

平成22年度 海洋博覧会記念公園管理財団 調査研究・技術開発助成事業

（財）海洋博覧会記念公園管理財団は、設立の目的事業に係る研究等の社会還元を目指した公益事業を展開するとともに、これをより一層推進していくため亜熱帯性動植物及び公園機能の向上に関する調査研究等を積極的・継続的に推進する団体・個人に対して平成20年度より研究助成を行っています。厳正な審査の結果、平成20年度は14件、平成21年度は16件の助成を行いました。平成22年度は次の16件の助成を決定しました。

亜熱帯性動物に関する調査研究・技術開発……………8件
亜熱帯性植物に関する調査研究・技術開発……………6件
その他事業の目的に沿った調査研究または技術開発……………2件
採用決定……………16件

亜熱帯性動物に関する調査研究・技術開発	
調査研究	亀田 和成（NPO法人日本ウミガメ協議会附属黒島研究所 研究員） 「リュウキュウイノシシによるウミガメ卵の採餌行動に関する研究」
	森川 裕久（信州大学繊維学部応用生物学系バイオエンジニアリング課程 教授） 「イルカの尾びれの段打による衝撃力の評価」
	長澤 和也（広島大学大学院生物園科学研究科生物資源科学専攻水圏生物生産学講座 教授） 「沖縄県産魚介類の寄生虫相、特に外来寄生虫を含む亜熱帯性寄生虫相の解明」
	杉原 薫（独立行政法人国立環境研究所地球環境研究センター NIESフェロー） 「日本の造礁性イシサンゴ類同定ガイド作成のための基礎研究」
	間野 伸宏（日本大学生物資源科学部海洋生物資源科学科専任講師 博士（農学）） 「クマノミ類の稚仔魚期におけるイソギンチャク共生機構の解明」
技術開発	大石 和恵（独立行政法人海洋研究開発機構特任主任 研究員） 「沖縄固有の哺乳類のモービリアウイルス受容体の分子生物学的解析と感染のリスク予想」
	中村 将（琉球大学熱帯生物園研究センター瀬底研究施設 教授） 「ミーバイ（ハタ）の成熟・産卵誘導技術開発」
	長嶺 隆（NPO法人どうぶつたちの病院 理事長） 「ヤンバルクイナの遺伝的多様性を確保するための効率的な飼育下繁殖技術の開発」

亜熱帯性植物に関する調査研究・技術開発	
調査研究	月岡 淳子（京都薬科大学附属薬用植物園 助教） 「 <i>Aquilaria crassna</i> の沖縄県における露地栽培の検討」
	陳 碧霞（琉球大学農学部 特別研究員） 「琉球諸島における伝統集落の景観構造と植生環境に関する調査研究」
	村上 明男（神戸大学自然科学系先端融合研究環内海域環境教育研究センター 准教授） 「カーに依存する希少藻類 ^{シロ} ウチンミドロの培養技術の確立と光合成生態の調査」
技術開発	山田 宏之（和歌山大学システム工学部 准教授） 「高保水性コンクリートパネルを用いた植栽基盤冷却プランターの技術開発」
	鬼頭 誠（琉球大学農学部亜熱帯農林環境科学科生態環境科学分野 教授） 「カバークロップを用いた沖縄における赤土流出防止と土壌肥沃度の向上に関する技術開発（特に、景観保全的作付体系と多面的な利用性の構築）」
その他事業の目的に沿った調査研究または技術開発	
調査研究	佐々木健志（琉球大学資料館（風樹館）教務職員（博物館学芸員）） 「現存する蕨類資料のデータベース構築に必要な基礎的資料の収集と蕨類の教材化に関する調査研究」
技術開発	松井 徹（琉球大学熱帯生物園研究センター・分子生命科学研究施設 准教授） 「沖縄に生息する土壌微生物機能によるバイオファーターライザー開発」

【亜熱帯性動植物に関する普及啓発】

美ら海自然教室 「サメの秘密を探る」



講師と一緒に真剣に解剖する参加家族

海の生物について学ぶ美ら海自然教室では、1月に総合研究センター研究第一課佐藤圭二主任技師を講師に、サメについて学ぶ教室を開催しました。

サメの特徴や分類、沖縄・日本における生態等、基礎知識から専門的な知識まで、水族館管理の現場からの実体験を織り交ぜながら、分かりやすい解説を行いました。怖い海の生き物というイメージが強いサメですが、参加者は解説を聞き、サメについて理解を深めていたようでした。解説の後には、液浸標本を4〜5名のグループに1体ずつ割当て、解剖を行いながら体のしくみを解説しまし

議・蘭展―沖縄大会―、是非ご期待ください。
(瀬底 奈々恵)

水族館の刊行物

沖縄美ら海水族館では、過去に実施された企画展やシンポジウムのパネルなどを印刷物として再編集し、教育普及活動の教材として利用しています。これまでに、「やんばるの川と生きもの」、「海の幸マチ類展」、「南海の巨鯨と巨魚!!大動物展」、「暗黒の海に生きる深海鮫展」の4編の冊子が作成されています。これらの冊子は、移動水族館や各種講演会など、水族館が実施する教育普及活動の参加者に無料で配布しています。

また、2007年に実施された国際シンポジウム「未知の世界へ、神秘的な深海生物を探る」では、発表内容を論文集として再編集し、PDF版刊行物として発刊、現在も世界各地の専門家に配布・配信されています。現在、2009年に実施された海生動物の繁殖に関する国際シンポジウムの論文集を編集しており、平成23年度の刊行を目指しています。

水族館では、今後も海洋生物の保護および知識の普及啓発のため、様々な企画展示を行い、冊子類をシリーズ化する予定です。そして子ど

た。サメの解剖という貴重な体験に、参加者は強烈なオイにも負けず、とても興味を持つて臨んでいました。また、顕微鏡を用いてサメの肌の微細構造を観察するなどしました。

参加者からは、「貴重な体験ができた、ためになった」等の感想、ご意見を頂きました。これからも総合研究センターでは、自然環境や生物等について楽しく学べる教室を開催していきます。
(篠原 礼乃)

美ら島・美ら海こども工作室 「ランの花を作ろう」 「牛乳パッククラフト」

「ランの花を作ろう」をテーマに、2月に牛乳パックを材料にランの花を製作する教室を開催しました。まずクラフトを作る前に、カトレア、パフィオペディラム、ファレノプシス、オンシジウム等ラン類の、ペタル、セパル、リップ、ずい柱など、ランの花の構造等について学習しました。その後、あらかじめ用意していた花のパーツの型紙を用いて牛乳パックを切り取り、マーカーで着色し、両面テープやマスキングテープを使って、花の形を組み上げて行き、仕上げて花卉の装や反りなどを、牛乳パックを曲げるなどして表現しました。

参加者は本物のランの花を参考にしながら、着色については思い思いに見ながら、着色については思い

野生動物と海のゴミ ―環境保全への取り組み―

も達から大人、さらには専門家に至るまで、幅広い層のニーズに応えられる活動を展開していきたいと考えています。
(佐藤 圭一)

当財団ではサンゴや海草類にいたるまで、その保護や環境を保全するための普及啓発活動を行っています。今年度は沖縄県青年団協議会の協力で、ゴミなどが野生動物に与える影響についての講演後、海岸の清掃活動を実施しました。また、毎年実施している「ウミガメ学習会」では、砂浜に寝転んでもらい、ウミガメの目の高さで漂着したゴミが産卵の為に上陸したウミガメにどのような影響があるかを体験していただいています。他にも「イルカ学習会」、「マナティーししく体験」、「美ら海自然教室」、「美ら海体験祭り」などで、パ



マダライルカの胃とゴミ

の色を塗り、オリジナルのクラフト製作を楽しんでいました。時間を忘れるほど熱中し、終了の時刻になってもクラフトづくりを行っていました。

教室終了後行ったアンケートでは、職員をサポートがよかったというご意見の他、い草クラフトやドングリ等の木の実クラフトも体験したいとの声もありましたので、今後の教室開催テーマに取り入れるなどし、より楽しく学べる教室を開催していきます。
(篠原 礼乃)

第11回アジア太平洋蘭会議・蘭展 ―沖縄大会―開催に向けて



中国・重慶で開催された第10回アジア太平洋蘭会議の様子

海洋博公園 熱帯ドリームセンターでは、1986年の開館以来毎年2

ネルや飼育員の体験談、講演を通じて、ジンベエザメ、イルカ、ウミガメ、ジュゴンなどが海のゴミにより被害にあっている現状を紹介しています。沖縄美ら海水族館の1階の出口付近ではマダライルカの胃袋を展示しています。このイルカは当財団が平成9年に保護後、2日で死亡しました。保護時から非常にやせており、解剖の結果、胃袋からゴミがたくさん出てきました。ゴミをエサと間違つて食べてしまった結果、消化できずに死亡したと思われます。

沖縄を訪れる多くの観光客の方は沖縄の魅力のひとつとして、海の実しさをあげています。一方、県内の方からは近年、海が汚れてしまったという話も伺います。私たちは沖縄の美しい海のすばらしさを紹介するとともに、さらにその環境を保全するための努力を続けなければいけないと考えています。
(小野 英彦)

【首里城に関する普及啓発】

首里城公園企画展 うるしの王国 琉球

首里城公園では、南殿二階特別展示室で、「うるしの王国 琉球」と題して4回連続の企画展示を開催中です。各回の個別テーマは、第1回が「神に捧げたうるしのうつわ」(平成22年7月9日〜10月2日)、第2回

月に「沖縄国際洋蘭博覧会」を開催しています。国内外から色とりどりのランが多数出展され、それらの色・形、大きさなどが競われます。国内で行われる国際規模の蘭展としては最も歴史のある本博覧会ですが、2013年の2月には「Asia Pacific Orchid Conference (APOC:アジア太平洋蘭会議・蘭展)」というアジア太平洋地域で最も大きなランのイベントが同時開催されます。

APOCはランの栽培、研究そして展示を通して、ラン産業の発展を促進することを目的に設立され、現在では日本・インドネシア・オーストラリア・タイ・台湾・韓国・中国などアジア太平洋の20以上の国と地域が参加しています。APOCでは、通常のランの展示会だけでなく、学術会議、また参加者による交流会などが広く開催され、これら活動により、ランの専門家だけでなく、趣味家や生産者も知識や技術を向上することが可能になりました。第1回目(1984年)の東京を皮切りにアジア太平洋地域の加盟国で3年に1度開催され、2010年の3月には第10回大会中国・重慶市開催が終わり、次の開催地である沖縄にバトンが渡されました。

世界から集うラン、そしてランを愛する人々。2013年に海洋博公園で開催する「アジア太平洋蘭会

が「ごちそうを盛る うるしのうつわ」(平成22年10月3日〜12月17日)、第3回が「献上された琉球楽器」(平成22年12月18日〜平成23年2月9日)、第4回が「青貝の輝き」(平成23年2月10日〜4月22日)となっています。

第1回は、琉球王国時代に首里城などで行われた儀礼の時に使用された祭祀道具としての琉球漆器の使い方、第2回では、東道盆と呼ばれる琉球独特の料理を盛り付ける道具などの展示を行いました。第3回は、当財団が復元製作した尾張徳川家伝来の琉球楽器、式の展示を行いました。第4回は、琉球から中国皇帝や徳川将軍などに献上した美しい螺鈿漆器を紹介しています。どの企画展も、漆器の道具としての使い方や、製作技法の解説などを中心にわかり易い展示解説に努めました。またFM沖縄の「風に吹かれて首里城めぐり」などの放送やポッドキャストの配信を通じて県内外へ企画展の魅力をお知らせしています。

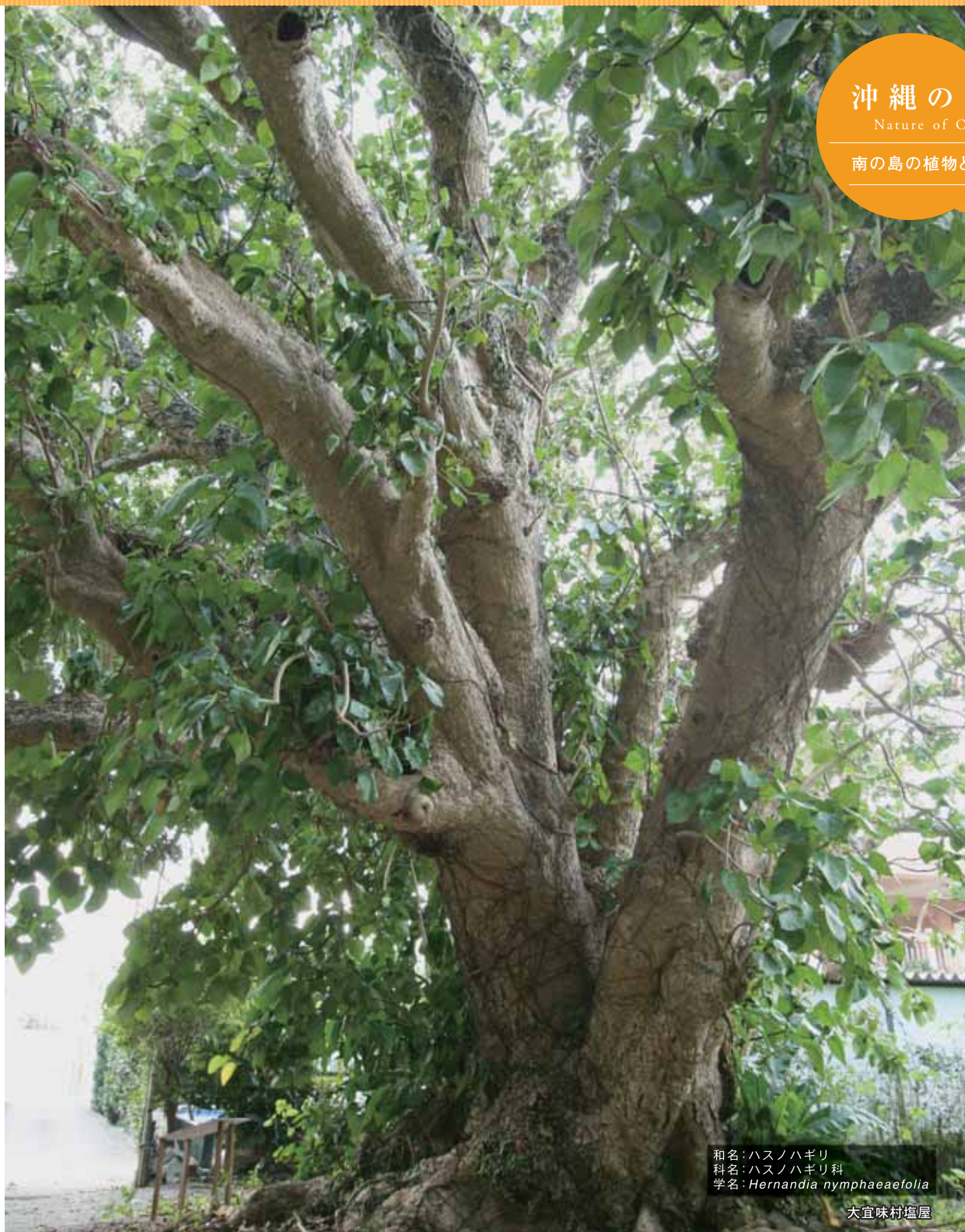
館内でアンケート調査を行ったところ約90%の回答者が内容に関して面白かったとの回答があり、満足度の高い企画展になっています。次年度以降も様々な企画展を開催し琉球王国時代の歴史文化を紹介していきたいと考えています。

(上江洲 安享)

沖縄の自然

Nature of Okinawa

南の島の植物と動物たち



和名：ハスノハギリ
科名：ハスノハギリ科
学名：Hernandia nymphaeaeefolia

大宜味村塩屋

シリーズ 沖縄の大木⑫

ハスノハギリ

ハスノハギリは海岸砂地に自生する常緑高木で奄美大島以南、西インドから東南アジアにかけて分布しています。

耐潮性・耐風性が強く、古くから防風林や護岸林として植栽されてきました。和名の「蓮の葉ぎり」は葉がハスの葉に似ていることに由来しており、その材は下駄や箸などに利用された他、種子から得られる油は有毒である一方で薬用、工芸用として有用とされています。ハスノハギリの果実を餌として食べたヤシガニはその毒を体内に蓄えるとされ、沖縄で報告されているヤシガニの中毒例はハスノハギリの果実に由来していると考えられています。

その他、子ども達は果実の孔に息を吹きつけてブーブーと音を鳴らして笛にしたり、果実の孔に蚩を入れて遊んだりしており、「ブーブキ（音に由来）」や「ジンジンハヤキ（ジンジン＝蚩に由来）」等、地域に残されている方言からも人々の暮らしに身近な樹木として存在していたことがうかがえます。

沖縄県では名護市宮里の御嶽にある群落が県の天然記念物として指定され有名ですが、大宜味村塩屋には樹高約11メートル、幹周り約5.7メートルの推定樹齢300年といわれるハスノハギリが生育しており、2005年、地域にある巨木や老木を対象に県が認定する「おきなわの名木百選」に認定を受けました。先の戦争でほぼ全焼してしまった塩屋区ですが、このハスノハギリは戦火を免れ、時代の変遷を見守ってきました。

今でも地元の人々により周囲の清掃等が行われる等、地域に深く根ざした貴重な古木となっています。

（下地俊充）

シリーズ 沖縄の希少動植物⑫

植物 カンダヒメラン

湿地に生じる野生らん



沖縄本島北部から中部、石垣島、西表島かけて、山地やサガリバナ林の湿った林床に生育するラン科植物です。夏緑性の多年草で、草丈は花茎を含め20センチ程になります。

総状花序は頂生し、20輪から多いときには40輪もの花を咲かせます。自生地は、山裾の常緑照葉樹林に囲まれた窪んだ場所、風通しが悪く陽がよく当る湿地です。高木類はほとんどなく、中木のケカンコノキやイヌビワ、草本のテツホシダやカヤツリグサの仲間などと混生しています。その他、

周辺にはミスミイ、ヒメウマノミツバ、コケオトギリ、スプタ、カングレイなど、多種の湿地植物が見られます。

本種は、沖縄県の固有種で、沖縄は世界で唯一の産地とされています。

もともと自生地と個体数が少ない上、園芸用の採集、自然林の伐採、遷移の進行等で絶滅の危機に瀕しています。

和名は、野生ラン写真家の神田淳氏の名前に由来するとされています。

（阿部 篤志）

和名：カンダヒメラン
科名：ラン科
学名：Malaxis kandae
レッドデータカテゴリ：絶滅危惧IA類（沖縄県）、絶滅危惧IA類（環境省）

動物 世界最大のイラブチャー カンムリブダイ

世界最大のブダイ科の魚類で、インドー太平洋域に分布しています。数十尾の群れを作って泳ぐ様子は見事で、老成魚では頭部がこぶ状に隆起します。

ブダイ科魚類は、日本に30種以上分布しています。その餌は岩についた付着藻類や造礁サンゴなどです。カンムリブダイは、両顎の歯板がくちばし状になっており、岩などの表面をガリガリと削り取って食べています。

クジラブツダイと呼ばれて親しまれている八重山近海でも、近年大型個体の確認例が極めて少なくなっています。大型のため、夜、岩陰などで寝ているところを簡単に漁獲されることがや、生息場所のサンゴ礁等の環境が悪化していることなどがその原因と考えられます。絶滅危惧II類（VU）に指定されており、保全措置が必要です。

（竹本 淳史）



和名：カンムリブダイ
科名：ブダイ科
学名：Bolbometopon muricatum
レッドデータカテゴリ：絶滅危惧II類（沖縄県）



鼠浄土

ねずみ

じょう

ど

名護の民話

昔、嘉津宇岳(かつうだけ)という山のふもとの村に、良いおばあさんと悪いおばあさんがいたそう。良いおばあさんがあるとき、「きょうは一日中働くから、餅を弁当代わりに持って行こう」と思って、餅を作って畑にでかけた。その途中に溝があったので、その溝をひよいとまたいだ時に、おばあさんが持っていた餅のひとつが落ちてしまった。

落ちた餅はゴロゴロゴロゴロ転がって小さな穴に入ってしまった。おばあさんが近寄って穴をのぞいたら、穴の中から「オモチゴロゴロ、オモチゴロゴロ」という声が聞こえてきた。「ほっ、おもしろいねえ。穴の中から声が聞こえる」と、おばあさんは残っていた餅を穴の中に入れた。すると、また「オモチゴロゴロ、オモチゴロゴロ」と聞こえてきた。おばあさんはますます

すおもしろくなって、自分の持っている餅を全部穴の中に入れてしまった。

しばらくすると、穴の中から大きな鼠が出てきて、「おばあさん、今日はほんとうにごちそうになりました。私の子供たちは、おばあさんのお餅がとてもおいしいといっって喜んで全部食べましたよ。そのお礼に、私たちの家にご案内いたします」と言った。

おばあさんは「はあ、これはありがたいことだが、あんたの方の家というのはこんなに小さな穴だから、私は入れないさあ」と言った。すると鼠は「いやいや、おばあさん、何も心配しなくていいです。目を閉じて私の尻尾をつかんでいて下さい。私が『もういいですよ』というまでは目を開けないでくださいよ」と答えた。おばあさんは「うんうんわかった。あんたのいう通りにやろう」と言って、しばらく目をつぶって鼠の尻尾をつかんでいた。

か、もうお帰りですか。それではおばあさん、お土産は何がいいですか」と聞いた。おばあさんは「いや、私は年寄りだから、何もいらないさ」と答えたが、「いやいや、ぜひ持って帰ってください」と、鼠は大判小判に金銀、財宝をざるいっぱい、おばあさんに持たせてあげた。財宝をいっぱいもらって家に帰ったおばあさんは、大金持ちになってきれいな家も造った。

すると、欲の深い悪いおばあさんがそれを見て、「はっ、どうしてあんたは、こんな金持ちになったのか」と良いおばあさんに聞いた。良いおばあさんは正直者だから、その成り行きを全部話した。それを聞いた欲の深いおばあさんは「そうか、ようし、私ももっとたくさん餅作って、財宝をたくさんもらってこよう」と考えた。そして、良いおばあさんの真似をして、溝の近くの小さい穴に、お餅をわざと入れた。すると、穴の中から「オモチゴロゴロ、オモチゴロゴロ」と聞こえてきた。また落としたら「オモチゴロゴロ、オモチゴロゴロ」と聞こえてきた。「あはあ、こっちなあ」と、欲の深いおばあさんはしめしめと喜んで、ドンドンドンお餅を入れていった。そして、今か今かと鼠が来るのを待っていた。

鼠が「はい、もう目を開けていいですよ、おばあさん」と言ったので、目を開けたら、いつのまにか大きな部屋に来ていた。するとそこには、部屋中に宝物がいっぱいあった。金、銀が光って、まばゆいぐらいの明るさだった。「ほっ、珍しいなあ、こんなところにこんな大きな部屋があつて、宝物もたくさんあるなあ」と、おばあさんはびっくりして声も出ず、ただ目をキョロキョロしていたら、案内した鼠が「おばあさん、今日はごゆっくりして下さい。ごちそうもたくさんあるし、また、子供たちの踊りもあるから、それをご覧になってからお帰りください」と言った。そしておばあさんの目の前に、たくさんのごちそうが並べられ、鼠の子供たちが歌ったり踊ったりしていた。へん賑やかに過ごした。

しばらく時間がたって、おばあさんが「もう、日も暮れたはずだから、私は家に帰りましょう」と言ったので、鼠が「そうです

しばらくして、鼠がきて「あなたのお餅は、ひじょうにおいしくて、私の子供たちがとても喜んでいました。そのお礼に案内しましょう」と、欲の深いおばあさんを案内した。欲の深いおばあさんが目を開けると、そこには金銀、珊瑚(さんご)やら宝物が山積みされていた。

欲の深いおばあさんは、「これは、全部ごっそり持って帰ろう。どうにかできないかな」と思いながら、ごちそうもたくさん食べて鼠の踊りも楽しんだ。「何かいい考えはないかな。そうだ、鼠の怖がる猫の鳴き声を出して、みんなが逃げ出したときに宝物をごっそり持って行こう」と考えて、欲の深いおばあさんは「ミャーウ」と鳴く真似をした。鼠たちは、猫がやってきたと思い驚いてみんなどこかへ逃げてしまった。

すると、穴の中は真っ暗闇になり、何も見えなくなってしまった。欲の深いおばあさんは出口も分からないし、宝物もどこにあるか分からなくなった。そして、どうとう穴から出られなくなって亡くなったそう。だから、人間は欲を深くするもんじやないよという話。終わり。

海洋博公園管理センター

公園全体で遊ぶ

昔のおきなわ生活体験

沖縄の古い集落を再現した「おきなわ郷土村」では、地元「本部町」のおばあたちが、来園者のおもてなしをします。お菓子を片手に「ゆんたく」や、三線演奏や踊りの体験等ができます。ぜひ昔の沖縄を体験してください。

- 毎日 10:00～16:00
- お問い合わせ/業務課 TEL 0980-48-2741

場所 おきなわ郷土村 無料



海洋文化館ガイドツアー

海洋博公園 海洋文化館には、世界的に貴重なカヌーをはじめ1000点以上の展示資料があります。ガイドツアーでは、この中でも特に貴重な展示資料を中心に紹介します。多くの方々のお越しを心からお待ちしています。

- 実施日: 金・土・日・月曜日
- (1) 9:50～10:10 (2) 10:50～11:10 (3) 13:05～13:25 (4) 14:20～14:40 (5) 15:35～15:55 (6) 16:50～17:10 (1日6回/各回20分)
- 定員: 20人程度(1人から開催)
- 集合場所: エントランスホール入口(1階)
- ※事前受付可・当日受付可(先着順)
- お問い合わせ/業務課 TEL 0980-48-2741

場所 海洋文化館 入場料のみ

第25回海洋博公園 マーチング・バンドフェスティバル



沖縄県内の小・中・高校生によるマーチング演奏

- 実施日: 4月29日(金) 10:00～16:00(予定)
- お問い合わせ/業務課 TEL 0980-48-2741

場所 噴水広場 無料

子ども体験まつり

ジンベエザメのペーパークラフト作り体験や公園内をめぐるスタンプラリーなど、家族で楽しめるイベントが盛りだくさんです。

- 実施日: 4月30日(土)～5月5日(木)
- お問い合わせ/業務課 TEL 0980-48-2741

場所 噴水広場、海洋文化館ほか 無料



生き物とふれあう

黒潮探検が自由観覧に

平成23年4月より、黒潮探検(水上観覧コース)が受付不要で自由に観覧できるようになり、タタの水族館がより楽しくなります。

- 4月1日(金)～10:00～14:30、17:30～20:00(最終入場19:30)
- お問い合わせ/魚類課 TEL 0980-48-2742

場所 沖縄美ら海水族館 入館料のみ



春休みイルカ学習会

沖縄近海のイルカやザトウクジラについて飼育員が解説します。

- 3月26日(土)～4月3日(日) 16:20～16:50
- お問い合わせ/海獣課 TEL 0980-48-2748

場所 イルカラグーン 無料



花と緑とふれあう

植物のクラフト作り

- 4月: 木の実のプレスレット、クロツグのバッタ
- 5月: アダンのカタツムリ、フイの馬グー
- 6月: 木の実のストラップ、アダンのかえる

- 毎日 8:30～18:30
- お問い合わせ/熱帯・亜熱帯都市緑化植物園 TEL 0980-48-3782

場所 熱帯・亜熱帯都市緑化植物園 無料



フラワーガイドツアー

- 毎日 11:00～、14:00～
- お問い合わせ/熱帯ドリームセンター TEL 0980-48-3624

場所 熱帯ドリームセンター(スタンダードホールより出発) 入館料のみ



総合研究センターでは、財団の調査研究事業等から得られた成果を広く紹介することを目的に、普及啓発事業として「美ら海・美ら島自然教室」「美ら島・美ら海こども工作室」「専門家講習会」等を開催しています。

美ら海自然教室

身近な自然で見られる魚や貝などの生き物やその標本を、身近な道具や顕微鏡を使って観察します。生き物の不思議や面白さ、観察の仕方、生態系や環境の重要性などを紹介します。

- 【海の危険生物】 5月7日(土)
- 【カニの秘密を探る】 5月21日(土)
- 【魚の赤ちゃんの世界】 6月4日(土)



美ら海自然教室の様子

美ら島・美ら海こども工作室

身近にある石や植物を材料にするなどして、多様な玩具作りを行い創造性を養います。

- 【こども凧(変りカーブヤー)をつくって揚げよう】 4月23日(土)
- 【渚や河原の小石でクラフトづくり】 6月18日(土)



河原の小石で作ったクラフト

総合研究センター

専門家講習会

当財団で実施した調査研究の成果について専門家向けに講習会を行います。

- 【植栽基盤に関する講習会】 5月27日(金)



講習会の様子

【お問い合わせ】総合研究センター 普及開発課 TEL 0980-48-2266

※講座申し込みは、実施日の1ヶ月前より開始いたします。※講座の内容及び実施日等については変更となる場合がございます。ご了承ください。最新情報や詳細はウェブサイト(kaiyohaku.jp)等でご確認して頂くかお気軽にお問い合わせください。

首里城公園管理センター

平成23年度 首里城公園企画展 (※有料区域 南殿2階 特別展示室)

「うるしの王国 琉球 IV」～青貝の輝き～

- 実施日: ～好評開催中～ ※4月22日(金)まで

■内 容: 琉球王国時代に中国皇帝や徳川将軍、大名に献上された美しい螺鈿^{らでん}の漆器の展示を通して、琉球漆器の技術の高さを紹介します。



黒漆宝尽螺鈿琵琶
(くろうるしたからづくしらでんびわ)
裏面に、おめでたい植物や道具が描かれています。



朱漆花鳥螺鈿卓
(しゅううるしかちょうらでんしょく)
可愛らしい花鳥が絵画的に描かれ、脚部分にも美しい唐草模様が螺鈿細工によって施されています。

※首里城南殿2階特別展示室は別途入館料が必要です。

「新収蔵品展」

- 実施日: 4月23日(土)～7月5日(火)

■内 容: 当財団が過年度に収集して未展示の収蔵品をお披露目します。



「朱漆三巴文盆」(しゅううるしみつどもえもんぼん)
「朱漆三巴文盆」は、朱漆が塗られた上に、尚家の印である三巴文が大きく描かれた丸盆で、首里城の「御内原(おうちばら)」で使われていたと考えられる一品です。
※御内原は、正殿の後方(東側)にある、江戸城でいえば「大奥」のことで、国王やその家族、女官等が住んでいたプライベートな空間のことです。

【お問い合わせ】首里城公園管理センター TEL 098-886-2020

※各イベントは内容の変更や中止となる場合がございます。最新情報や詳細はHP(oki-park.jp)等でご確認して頂くかお気軽にお問い合わせください。

【お問い合わせ】海洋博公園管理センター TEL 0980-48-2741(代表)

※各イベントは内容の変更や中止となる場合がございます。最新情報や詳細はHP(oki-park.jp)等でご確認して頂くかお気軽にお問い合わせください。